

會 告

第七回講演大會開催及講演者募集廣告

來る昭和六年十月中旬、九州、八幡市に於て本會第七回講演大會開催の豫定に有之候間御差繰多數御出席相成度候詳細のプログラムは決定次第大略は會告に又詳細は各位へ御通知申上ぐべく候猶同講演大會には可成多數講演者の御出場を切望致す次第に御座候

御出演希望の方は下記要項御覽の上期日迄に何卒本會宛御申込相成度此段謹告候也

昭和六年三月

社團 日本鐵鋼協會
法人

要 項

- I 講演申込期日は昭和六年八月十日迄とし、同期日迄に演題並講演大要(二千五百字以内)を本會宛御送附相成度候
- II 講演の詳細は本會々誌「鐵と鋼」に掲載可致も講演当日は大要のみ御講演相願度候猶講演時間は最長 25 分以内とし何分御希望なるか御知らせ下され度候
- III 講演の詳細を記述せる論文は以上の期日前後に不關可成至急御送附相願度候
(上記期日前に詳細論文原稿御送附の方と雖も必ず二千五百字以内の大要は御添付被下度候)

告 日本鐵鋼協會

日本標準規格 私費印刷分讓の件

1. 内容、形式、寸法共 商工省御編纂のもの同一なり。
2. 代金は 1 枚に付き 金壹錢也とす。但し郵税は實費。第四種郵便にて 17 枚迄で 2 錢 18 以上 36 枚迄で 4 錢 其れ以上は 20 枚内毎 2 錢増しのこと。

本會の發行 日本標準規格目次

規格番號	類別番號	名稱	決定年月日	商工省告示番號	右同告示年月日	枚數	規格番號	類別番號	名稱	決定年月日	商工省告示番號	右同告示年月日	枚數
第1號	B1	金屬材料抗張試驗片	11.10.19	43	14.3.5	2	40	H1	銅板	15.6.23	30	2.10.22	3
2	B2	針金の徑、薄板の厚及其の稱呼	〃	44	〃	1	41	H2	黃銅板	〃	31	〃	3
3	Z1	寸法標準數	13.3.27	17	14.9.18	1	42	H3	アルミニウム板	〃	32	〃	3
4	Z2	等比標準數	〃	〃	〃	1	43	H4	銅棒	〃	33	〃	3
5	G1	鍛鋼品	〃	9	〃	4	44	H5	ネーバル黃銅棒	〃	34	〃	3
6	G2	鑄鋼品	〃	10	〃	4	45	H6	高力黃銅棒	〃	35	〃	3
7	G3	鑄物用銑鐵	〃	11	〃	1	46	H7	火延黃銅棒	〃	36	〃	3
15	G4	水管罐用繼目無鋼管	14.3.27	18	15.10.26	3	47	H8	挽物用黃銅棒	〃	37	〃	2
16	G5	圓罐用繼目無鋼管	〃	19	〃	3	48	H9	繼目無鋼管	〃	38	〃	3
17	G6	機關車罐用繼目無鋼管	〃	20	〃	2	49	H10	機關車罐用繼目無黃銅管	〃	39	〃	2
18	G7	一般用繼目無鋼管	〃	21	〃	3	50	H11	復水器用繼目無黃銅管	〃	40	〃	2
19	G8	瓦斯管	〃	22	〃	1	51	H12	復水器パツキング	〃	41	〃	2
20	G9	構造(橋梁、建築其他)用壓延鋼材	〃	23	〃	6	52	H13	抑用繼目無黃銅管	〃	42	〃	3
21	G10	造船用壓延鋼材	〃	24	〃	5	53	H14	銅地金	〃	43	〃	1
22	G11	罐用壓延鋼材	〃	25	〃	6	54	K1	銅地金分析方法	〃	18	昭和 3.5.23	12
23	G12	鐵道車輛用壓延鋼材	〃	26	〃	6	55	K2	鐵及鋼炭素分析方法	2.10.3	20	昭和 4.5.13	5
24	G13	壓延鋼材の寸法及重量の公差	〃	27	〃	2	56	K3	鐵及鋼珪素分析方法	〃	〃	〃	5
25	G14	標準棒鋼	昭和 2.10.3	28	昭和 4.5.13	4	77	G18	罐用繼目無鋼管の寸法	3.10.18	32	昭和 5.6.2	1
26	G15	標準形鋼	〃	29	〃	16	78	G19	一般用繼目無鋼管の寸法	〃	23	〃	2
36	B8	管用れど	大正 15.6.23	26	昭和 2.10.22	1	79	G20	可鍛鑄鐵品	〃	24	〃	3
37	B9	管接手れど	〃	27	〃	1	80	G21	水道用鑄鐵管	〃	25	〃	4
38	G16	瓦斯管の寸法	〃	28	〃	1	81	H15	水道用鉛管	〃	26	〃	3
39	G17	銑	〃	29	〃	9	82	H16	亞鉛地金	〃	27	〃	2
							83	K4	亞鉛地金分析方法	〃	〃	〃	10

以上の外設計上の参考及製作規格等本會に關係するも多々あれども追ふて發行するものとす。

實物寸法 159mm — 四寸二分五厘

JES	日本標準規格	第55号
鐵及鋼炭素分析方法		類別 K2
		頁 1

第一章 總 則

第一條 本規格は鐵及鋼の炭素分析方法之ヲ適用ス

第二條 鐵及鋼炭素分析方法一次ノ三種トス

一、炭素鋼及鉄炭素分析方法
二、特殊鋼炭素分析方法
三、合金鉄炭素分析方法

第二章 炭素鋼及鉄炭素分析方法

第三條 本章ノ炭素分析方法は炭素鋼、炭素鋼炭素及合金炭素ノ定置法トス

第四條 本炭素定置法一次ノ法トス

一、取 扱

試料ヲ乾式燃焼法ニ依リ直接ニ鐵炭ノ氣流中ニ於テ熱シ炭素ヲ完全ニ酸化セシメテ炭酸瓦斯トシ之ヲ曹達石灰又ハ曹達石灰ニ吸収セシメ其ノ増量ヲ炭素ノ定量トス

二、炭 量 (用四参照)

(一) 特殊瓦斯淨化装置
未炭素ハ瓦斯淨化 (a) 部ニ於テ炭素瓦斯ヲ其ノ中ニ含有スル炭酸瓦斯又ハ有機性瓦斯等ヲ除去シ且淨化炭素ヲ「クロム」酸和硫酸 (硫酸比量 1-02) ヲ入レル洗瓶 (b)、曹達石灰又ハ曹達石灰ヲ填メタル管 (c) 及硫酸 (比量 1-04) ヲ入レル瓶 (d) ヲ順次連絡シタルモノトス

(二) 燃焼炉
燃焼炉ハ内徑約 3cm ノ管狀電氣炉 (1) 又ハ適當ノ瓦斯炉ニシテ電流又ハ瓦斯ヲ調整シ「バイオメーター」ニ依リ其ノ中央部ニ於テ長約 15cm ノ一定溫度ヲ保持シ得ルモノトス
炉ニ於テ兩端ニ約 15cm 突出シ得ル管ヲ有スル内徑約 2cm ノ煤氣燃焼管 (e) ヲ挿入ス又其ノ管中ニニ入モタルニ「磁製」ノ「フ」ノ位置ノ後方約 10cm 至ラテ白金石皿、白金石皿、石皿又ハ酸化鐵石皿ヲ填メタルモノトス

(三) 瓦斯吸收装置
本炭素定置法ニ依リ出タル瓦斯ヲ吸收セシムルニ「クロム」酸和硫酸 (硫酸比量 1-02) ヲ入レル瓶 (g)、五酸化磷ヲ入レル瓶 (h) 及曹達石灰又ハ曹達石灰ヲ入レル瓶 (i) 後方約 2cm ノ厚ニ五酸化磷ヲ填メタル 2 個ノ炭酸瓦斯吸收

昭和二年十月三日決定 工業品規格統一調査會

會 告

會費領收報告

正 會 員

金拾參圓五拾錢也	自昭和五年一月	至昭和六年六月	守谷 正毅		
金拾壹圓也	自昭和六年三月	至昭和七年二月	會費及入會金	野澤 弘幸	
金七圓五拾錢也	自昭和六年一月	至昭和六年七月	會費及入會金	守屋 逸男	日高 長次郎
金九圓也	自昭和六年一月	至昭和六年十二月	中山 制一郎		
金九圓也	自昭和五年七月	至昭和六年六月	石原 寅次郎	花岡 元吉	中島 統一
			淺田 讓		
金四圓五拾錢也	自昭和六年一月	至昭和六年六月	岩瀬 慶三	土橋 長兵衛	太田 秀穂
	渡邊 福雄	漢治洋公司工務所	辰巳 英一	向山 幹夫	野村 卓三
	寺井 修一		佐伯 卓平	木村 芳太郎	北村 秀教
金六圓五拾錢也	自昭和六年一月	至昭和六年六月	會費及入會金	鎌倉 正雄	
金五圓也	自昭和六年三月	至昭和六年六月	會費及入會金	堀 將之	高田 直之助
				水谷 浩	清水 勅夫
金四圓貳拾五錢也	自昭和六年四月	至昭和六年六月	多賀谷 正義	淺川 勇吉	
金四圓五拾錢也	自昭和五年一月	至昭和五年六月	德永 格		

准 會 員

金七圓貳拾錢也	自昭和六年一月	至昭和六年十二月	川口 一二		
金七圓貳拾錢也	自昭和五年七月	至昭和六年六月	渡邊 富美雄	黑瀬 彌	北岡 弘
金參圓六拾錢也	自昭和六年一月	至昭和六年六月	川井 清水	金本 恭三	建部 敏雄
	難波 靜磨	中山 正大	村瀬 鐵藏	梅澤 光三郎	山本 源八
	矢本 孝磨	藤野 銳男	寺角 茂	阿部 又三郎	柴田 吉治
	柳川 猛二	磯部 靜男	細井 市藏	太田 信重	小平 勇
金四圓六拾錢也	自昭和六年一月	至昭和六年六月	會費及入會金	吉野 藏之助	野田 親三
				龜山 龍馬	安西 泰
				一村 秀雄	堀越 義秀
				田中 熊吉	藤田 勇
金拾圓也	自昭和四年二月	至昭和五年六月	小川 健一		
金七圓貳拾錢也	自昭和五年一月	至昭和五年十二月	渡邊 進	清水 重治	神谷 基雄
金七圓貳拾錢也	自昭和四年二月	至昭和五年一月	江戶 美昭		
金七圓貳拾錢也	自昭和四年一月	至昭和四年十二月	小島 豐榮		
金四圓貳拾錢也	自昭和五年十二月	至昭和六年六月	中牟田 忠夫		
金貳圓八拾錢也	自昭和六年四月	至昭和六年六月	會費及入會金	落合 勇	藤本 一郎
				藤原 弘	